藤森栄一が提唱「縄文中期農耕論」

炭化種子の調査、考察説明

第38回すわ大昔フォーラム（諏訪市博物館、大昔調査会主催）が9日、同博物館学習室で開かれた。テーマは、同市出身の考古学者、藤森栄一（1911～73年）が提唱した「縄文中期農耕論」。74年に栽培種の可能性がある炭化種子が発見された縄文時代の遺跡「荒神山遺跡」（同市湖南）の発掘に携わった岡田正彦さん（82）＝飯田市＝が、炭化種子発見後の縄文中期農耕論の実証に向けた動きについて講話した。（山本雄太）

すわ大昔フォーラムで岡田さん

73年から75年にかけて、中央道建設に先立つ遺跡発掘が諏訪市内で行われ、初期は藤森も参加した。74年8月に荒神山遺跡で炭化種子が発見され、縄文時代中期から農耕が行われていたとする縄文中期農耕論の裏付けに期待が高まった。当初はイネ科のアワやエノコログサなどではないかとの見方だったが、解明が進み81年に炭化種子はシソ科のエゴマと断定された。

岡田さんは、藤森との出会いや荒神山遺跡発掘に触れた後、炭化種子の解明調査や考古学者らの考察について時系列を追って説明。エゴマと断定されたことについて「藤森先生は主食となるアワやヒエを考えていたと思う。エゴマも栽培植物であるが主食にはならず、先生の説を大きく裏付けることはできなかった」としつつ、「栽培植物と確認したということで、功績はあったのでは」と締めくくった。

フォーラムは同館で開催中のミニギャラリー展「中央道発掘から半世紀」の関連イベントとして開催。約40人が集まった。

藤森栄一が提唱した「縄文中期農耕論」の実証をテーマに講話した岡田正彦さん